

怪談

佐藤正映

(一)

石垣小学校の幽霊

時は昭和十三年（一九三八）支那事変が勃発した頃の実話です。

石垣尋常高等小学校は創立以来六十余年、南西は山林に東北は田畑に囲まれた純農村の小学校でした。

校長先生は豊島定一、風格厳正にして柔和な人柄の教育者でした。尋常一年より高等二年まで生徒数は約六百人、国策に添って生徒数も増加の途上でした。

夏休みを数日後に控えて毎日暑い日が続く。今日の当直勤務は後藤先生だ（当時は毎日交替で先生が宿直をしていた）。当直室では薄暗い電球の下で一学期の通信簿の作成に汗を流していました。先程までの夕焼け空は何時の間にか墨染の雲が広がりポツリポツリと降り出したようです。「ヤレヤレ一回りしてきて食事でもするか」

懐中電灯を照らしながら校舎を一回りして何事も無いのを確かめてから食事を取りそのままゴロリと横になりました。昼間の疲れが出たのか暑さも忘れグッスリと眠ってしまいました。どれくらい経ったのか、なんだか生暖かい風が首筋の辺りにスーッと吹いてきたのを感じて目が覚めました。遠くで虫の音がかすかに聞こえるだけの静かな夜だ。障子は締まっているのに生暖かい風が吹いてきます。頭を上げてフト見ると暗闇の中から一人の少年が音もなく現われました。起き上がった先生は大声で「誰か」と言おうとしたがそれは悲鳴に近かった。少年は持っている本をベラベラとめくって恨めしそうに立っている。尻餅をついた先生は声が出なくて見つめるだけです。本をめくっていた少年は何時の間にか姿を消した。フトンにもぐりこんだ先生は暑さも忘れてガタガタ震えていました。一夜が明けて何時ものとおりの生徒達が登校してきました。

先生は、昨夜の出来事を職員朝礼で報告しようと思っただけなのに言い出せなかった。その日は一日中仕事に手が付かない。私の錯覚かなと思ったりした。誰かに話し

でも一笑に付されてしまふだろう。やっと一日が終り早々に帰宅すると夕食もそこに眠ってしまいました。

家でぐっすり眠ったので、翌日はすがすがしい朝を迎えて元気に登校しました。職員朝礼が始まり何気なく緒方先生の顔を見た。何だかおかしい、何時もの笑顔は見えず心なしか青ざめている。「さては」と思ったがお互いに何も言ひ出せなかった。昨夜の当直は緒方先生だったのです。昼休みになって先生に「昨夜はよく眠れましたか」と声をかけると、ドキッとした先生は顔を上げて語り始めました。

二人の先生の経験した様子は全く同じ少年の幽霊でした。

やはり本当だったのかと二人は顔を見合わせて苦笑しました。早速校長先生に報告せねばと意見の一致した二人は、校長先生に諸先生を前にして一部始終を話しました。聞いていた先生の中には笑いだして「それは誰か生徒のいたずらだろう、何時も叱られている生徒が憂さ晴らしに先生を驚かしたんじゃないの」とか「暑いので二人とも頭が変になったんじゃない」とか言い出す始末に

二人は閉口してしまった。その中で一人平松先生が笑いが消えて小さい声で「誰か今夜の当直を交替してくれない」といったので、皆は一時シーンとなりました。

すると頑丈な竹林先生が「俺が替わってやる、そげな馬鹿なことがあったまるか」と威張って言ったので、恥も外聞もなく平松先生は「ではよろしく頼みます」といつて胸を撫で下ろしたので皆ドッと笑いました。

さて次の朝を迎えた。鬼のような顔つきの竹林先生のことだ、流石の幽霊も恐れをなして出なかっただろう、もし出ればあの拳骨で殴りつけるだろう。とか皆勝手なことを言いながら職員朝礼が始まった。

「おかしいなあ、竹林先生の顔が見えんぞ」と言う声に皆一瞬黙って顔を見合わせました。そこへ小使の松川さん(当時の雑役職員)が跳んできてドモリながら言った。「タタ竹林先生がまだ寝ています」と、昨日の勢いはどこへやら小さくなって起きてきた先生を見て、笑いかけた皆は急に笑いを止めました。

校長先生はみんなの先生を前にして三人の先生に色々尋ねたが、三人ともに見た幽霊の存在を否定すること

(二)

H・I

十二単と武者の妖怪

C 中学校に転勤が決まると同僚から実にお節介な忠告を受けたものです。その忠告には段々尾鰭がついて、私の心底を察してか秘かにほくそ笑んでいるようでした。

C 中学校の東側を南北に通る旧往還道は、三百米くらい北に行く矢城谷があり、車が通れるような道ではなかったし、逆に境川までの道は、両側が藪だったように思います。また学校の前を通る道は、海岸から水田の中を通り温研の桜並木に通じる一本道でした。

学校の前は古くからの墓地で何本か松の太木があったように思います。私が勤務してからも学校前の材木置場で猪が畏にかかったことがあります。

夜になると淋しい所で、晴れた夜は満天の星空の下、木々や藪の黒い影の間から漏れてくる農家のともし火はいまでも記憶にあります。

本館、その北側に平行して建つ校舎と本館に接して体育館がありました。実はこの体育館の建築にまつわる不気味な話がこの学校の怪談の伏線になっていたのです。

は出来なかった。対策は色々続いたが何らよい方法は見出せなかった。その時小使いさんが口をモグモグさせながら言い出した。「是定に見映さんチ言う御被いのうまいオッサン(和尚さん)が居るけん、こんしに頼んで拜んで貰うたらどげやろうか」と、他によい思案の浮かばない校長先生は非科学的とは思ひながらも承知しました。早速小使いさんが是定に走った。話をニヤニヤしながら聞いていた見映さんは「それじゃ、拜んでみるか」と言いつて仏飯を炊くように妻女に言いつけた。その夜暗くなってから当直室で灯明、線香を立て仏飯を供えて一心に祈禱する見映師の読経が一時余り続きました。「もうこれから出ないだろう」と言う師の言葉を伝へ聞いた先生達は、その後も暫くは二人組で当直につくようになりました。

それ以来誰も幽霊の姿を見た人は無く何時の間にか忘れられてしまった。思うにこの幽霊は当直室に泊まる先生に勉強を教えてもらいたくて迷い出たのでしょうか。

(註 今の校舎を立て替える前の話、先生は一部仮名、一部フィクションです)

二月、半ば完成していた体育館が突風で倒壊したり、ほぼ完成してから突然梁が落ちたり、作業員が事故で死亡するなどという奇怪な不祥事が連続したそうです。

そんなことがあって体育館の中には只ならぬ妖気が漂っている、などの噂があったので呪師に見てもらったら「石垣原の合戦で討ち死した武者が埋まっていて、その額のうえに柱がのっている」ので、この武者の祟りでこのような変事が起こっている」そうで、急いで供養する必要があるということになったそうです。

それで、学校は市当局や父兄と相談して、体育館の裏に祠を建てて供養をするようになりました。毎年二月十八日に校長や職員と生徒会長が参列して、海門寺の和尚さんに読経をお願いしていました。

ただ、気味の悪かったことは、倉庫に保管してあった代々の夜警日誌のなかに、「何時何分、青白い人魂が本館の屋根の上を飛んだ」とかいふ記事が時々あることでした。夜警日誌は公務の記録ですから出鱈目を書くことは先ず考えられません。人魂は前の墓地から飛んでくるのかも知れませんが、幸いにも私は遭遇したことはありません。

ので、樗の棒を持って行きました。怖い気持ちを鼓舞するために、樗の棒で廊下を力を入れて突き大きな音をたてながら、漆黒の闇を照らす懐中電灯の丸い輪を頼りにゆっくりと歩きました。早く歩くと却って何かに追われているような恐怖心がつるので、やせ我慢してゆっくり歩くのです。懐中電灯の明かりの外に何かが潜んでいるようで、やたらと振り回しました。

森閑とした夜の校舎では、廊下を突く棒の音がやたらと響きました。幸運にもとてもいいですか妖怪には一度も出会いませんでした。私は戦々競々でしたから妖気は常を感じましたが。

勿論科学的では妖怪など否定されますが、C中学校の妖怪が石垣原合戦の亡者とするのには異論があります。

合戦の激戦地は実相寺山や角殿山と立石を結ぶ線上の鶴見原（石垣原）で、C中学校は完全にその域外にあるのです。貝原益軒の『豊国紀行』の中に「石垣原ハ鶴見嶽（由布岳）、鶴見山両山の麓にあり。古戦場なるゆへ、雨夜にハ今も往々鬼哭するよし里人いへり、又矢の根、こうがいなど、時々此原にて拾ひ得るもの有と云

ません。今となつては残念に思いますが。

さて、いよいよ妖怪のことですが、先輩や小使いさんや夜警さんの話では、出るのは何時と限ることではないが、妖怪は十二単の女性か鎧武者ということでした。

宿直は順番で一月に大体一回くらいでしたが、われわれ独身者は、妻帯者や年寄の先輩に頼まれると断れずにいよいよ引き受けたものです。ただ、宿直の旨味は代直した宿直費が頂けましたので、給料より多く稼ぐ独身の先生もいました。

教師が巡回するのは八時頃と寝る前の十一時頃までで仕事に熱中していると十二時以後になることもありました。それ以後は夜警さんが廻りました。

妖怪が出るのは、火災で焼けていまはない北側の木造校舎の二階で、踊場やそこから廊下を右に廻るところがその場所で、廊下の隅に青白い顔をした十二単か、血だらけの鎧武者が座っているということでした。また、廊下を曲がる寸前に断ち切られた大きな手がニュッと出てくるとも言われていました。

校舎を巡回するときには、泥棒に出くわすこともある

と書かれてあります。鬼哭とは「鬼が夜泣きすること」ですからまことに不気味です。もし妖怪が出るのならばC中学校よりこちらの方でしょう。ちなみに「矢の根」は鎌で、「こかうがい」は短刀の事です。

また、合戦には死者や負傷者がでるのは当然で、常に金瘡医（外科医）が従軍して戦場から少し控えた所で、黒田軍は実相寺山の東麓にあった実相寺、大友軍は本陣付近の谷間で死体の処理や傷の手当をしたそうです。実相寺は本堂などに、死傷者を収容したので寺の床一面が血糊に染まったため、寺を焼き捨てたと伝えられています。今の実相寺は後に森領になってから今の位置に建て替えられたものです。

C中学校の位置はどの場所にも当てはまりません。しかし供養を怠ったから、北校舎が火事で焼けたのだとか今でも噂が絶えません。

平成二年わが家を緑丘に新築しました。当時ある人が訪れて「私は莊園に土地を買いましたが、怖くて家を建てていません。此方（こちら）さんはどうですか」と尋ねられて驚きました。怪談はいまでも生き続けているのです。